

今年のひとつ

本間一恵

「BN が所蔵するバスケットのコレクションも、最近ほとんど増えていない。買いたいと思うものに出会わないからだ。」と前回の冒

頭に書いた。まったくその通りで、気が付けば今年2021年購入したものは一つだけに終わった。

12月も下旬、劇場のスタジオ公演のチケットを手に JR 関内駅で降りた。開演時間まで間があったので、久しぶりに中華街へ寄り道することにした。BN のかごコレクションは、旅先で買ったものや、いただいたもの、拾ったものまで含めて来歴は様々だが、かなりの部分は首都圏で見つけて、たまたま購入したものである。いくつかある常連の場所のひとつが横浜中華街だった。しかし、BNに店の紹介記事も書いたはずである。

まだあのころの民俗雑貨店は営業しているのだろうか。コロナをものともせぬ若人達が埋めつくされた通りは、飲食店、食べ歩き用の出店の数々でにぎわっていた。100円でゴマ団子を一個買って、そのぬくもりをポケットの中で楽しみつつ歩いていると、ありました。以前と同じ場所に3軒ほど。

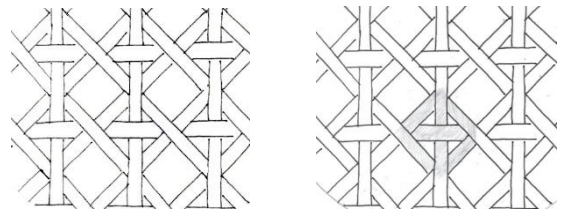
エスニックな品ぞろえではあるが、どこも目に付くのは衣料品ばかり。雑貨はほとんどない。3 軒目でようやくかご類などを少し見つけることができた。あまりにも寂しい状況の中、ようやく目に留まったのがこれ。ポプリなどを袋に入れて吊るす、という使い方が書いてあったが、あまり納得できない感じ。よくあるコイルングのコースターの縁部分を2つ合わせたような形で、中央の部分が8つ目編みになっている。同じような構成の大きめの皿をすでに持っているな、と思った。でも、せっかく久しぶりに来たんだし、雑な作りの多い中で丁寧にできていたし、新しい何かを作ろうとしているみたいだし、と3つぶら下がっていた中から一つ選ぶ。このいくつかある中から一つを選ぶのがなかなか難しい。同じ人が作っているのかもしれないのに、ひとつずつ違うのだ。大雑把に言うと、均質で緻密できれいでシャンとしている系と、全



体にちょっと緩い雰囲気気で揺らいでいる系。今回も選んだのは、後者に属する最初に目をとまったやつ。8つ目が少し大振りで均質感がなく、材も艶がない。どうしてこっちなのか？

連れ帰ってから改めてよく見ると留め具などのディテールはバリ島の製品と同じ。そして、同じように見えた八つ目編みは、違っていた。

右のタイ(たぶん)のかごは、四つ目編みをした上に2方向を足しているが、これは3方向をただ重ねておいて、4方向目の材を縫うように入れていくことで全体が編まれる、というシステムだった。図で見てもわかりにくいですが、編む過程は違う。



予想はしていたものの、以前と比べてすっかり魅力のない品揃えに、なんだか申し訳ない気持ちになってしまった。以前はもっと多様で面白いものがあつたのに、大人達がこの何十年かでつまらない世界にしてしまったのだろうか、と。一方、ピースなど細かいものの売り場は大きくひろがっていた。自分の好きなパーツを探して自分だけのアクセサリを作りたい、という若者が多いのだろう。別の楽しさは生まれ続けていて、それをつまらなそうに思ってしまうのは上から目線なのかもしれない。

ポケットの中ですこし冷めてしまったゴマ団子をかじりながら、夜道を劇場へ急ぐ。今夜のダンス公演の原点は、日本の能の演目。それを近代の小説家が戯曲化し、それにインスピレーションを得て、フランスの劇作家が出演者の日本人ダンサーと共に創作したもの。舞台上には、若々しい体躯の女性ダンサーと88歳の俳優の二人。少ないセリフはフランス語で字幕が出た。中世に生まれた能楽が、伝統そのままに守られていく一方で、こんなふうに変えながら今に生き続けているのが面白い。